

短大・大学1年生の「英語を使用する理想自己（‘ Ideal L2 self ’）」についての調査

著者	原 めぐみ
雑誌名	研究論集
巻	105
ページ	201-212
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.18956/00007732

短大・大学1年生の「英語を使用する理想自己 ('Ideal L2 self')」についての調査

原 め ぐ み

要 旨

短大・大学1年生が抱えている「英語を使用する理想自己 ('Ideal L2 self')」がどのようなものであるかを分析すること、'Ideal L2 self' が曖昧である学生に対し、'Ideal L2 self' を意識できるようなアプローチを授業内外に取り入れる方策を提案することが、この研究報告の目的である。そのために短大1年生と外国語学部英米学科1年生計105名を対象に自由記述式回答を含む質問紙調査を行った。その結果、1年生の 'Ideal L2 self' は曖昧であり、外国人と話したいなどの動機づけが高いが、留学した際に何を学びたいかなどといった具体的な目標を持っている学生が少ないことが判明した。また、先行研究では存在しなかった「(英語が話せるようになったら) 外国人を道案内などで助けたい」というカテゴリーが出現した。今後は授業内では、CLIL型の教授法を行い、授業外でプロジェクト型タスクを課しながら、留学生と交流できる機会を増やすアシストを教員が行っていく必要がある。

キーワード：Ideal L2 self、動機づけ、道案内、CLIL型、留学生と交流

1. はじめに

文部科学省(2015)は、「教育課程企画特別部会 論点整理」の中で、新しい学習指導要領が目指す外国語活動・外国語科の方向性について以下の通り示している。

英語を「どのように使うか」、国際共通語としての英語を通して「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という観点から、児童生徒が将来の進路や職業などと結び付け主体的に学習に取り組む態度等を含めて育まれるよう、学習・指導方法、評価方法の改善・充実を図っていくことが求められる。

このように小・中・高において、英語を知識としてだけでなく、グローバル化する社会に対応するために、「話す」「書く」などの発信スキルに重点を置いた英語教育が展開されようとしている。大学教育においてもグローバル人材の育成の必要性が叫ばれてから久しい。2020年に

開催される東京オリンピックを目前に控え、海外からの観光客も増加し続けている。本学は、「キャンパスは“ちきゅう”」というビジョンを掲げ、海外留学派遣者数全国1位、外国人教員数全国2位などという実績がある国際色豊かな大学である。このような時代に外国語大学を選択した学生がどのような英語を使用する理想自己イメージを持っているのかを調査し、授業改善を図る。

2. 問題と目的

本学で初年度の英語必修科目を担当して、5年が経つ。担当した学生の授業態度などから、本学では英語学習に積極的に取り組んでいる学生が多いことが窺える。しかし、彼らの入学時のTOEFL ITP 平均点は外国語学部英米語学科が433点、短期大学部は395点であり、本学の長期留学応募要件のスコアである平均480点以上には及ばない。この結果から必ずしも英語運用能力に自信を持っている学生が大半を占める訳ではないことが、本学の課題である。このような学生が卒業時に英語プラスアルファのスキルを身につけ、グローバルな舞台で活躍できる人材として育つことを手助けすることが本学教員の使命であり課題である。本研究の1つ目の目的は、入学後間もない1年生が抱いている英語を使用する理想自己（以下‘Ideal L2 self’）が具体的にどのようなものであるかを分析することである。中田（2016）は理想自己と動機づけの関係に関して以下のように述べている。

曖昧な学習目標しかもっていないかったり（例えば、英語がネイティブのように話せるようになりたい）、逆に短期的な目標（目の前のテストやTOEFLのスコア）しか持っていない学習者は、長期的に自己の学習を捉えたり、効率的な学習方略を確立できていない傾向がある。長期的な目標には理想自己（‘Ideal L2 self’）も含まれ、このような目標は様々な困難にも耐えうる動機づけとなる。（中略）

この先行研究から‘Ideal L2 self’が外国語学習の強い動機づけになるということが示されている。‘Ideal L2 self’や学習目標が曖昧である学生に対し、これらを内在化できるようなアプローチを授業内及び授業外に取り入れた指導や授業改善の方策を提案することが、本研究の2つ目の目的である。

3. 研究の背景

‘Ideal L2 self’とはDörnyei（2009）によるとL2セルフシステム（L2 Motivational self

system) の義務自己 (Ought-to L2 self)、学習経験 (L2 Learning Experience) 3つ要素の1つであり、以下のように定義されている。

'Ideal L2 self', which is the L2-specific facet of one's 'ideal self': if the person we would like to become speaks an L2, the 'Ideal L2 self' is a powerful motivator to learn the L2 because of the desire to reduce the discrepancy between our actual and ideal selves. Traditional integrative and internalized instrumental motives would typically belong to this component.

つまり 'Ideal L2 self' とは、目標言語を使用した理想の自分のイメージのことを指し、現実の自分と目標言語を使用している理想の自分の差を埋めようとするため、第二言語を学習する強い動機づけになるとされている。さらに、Dörnyei, Henry, and Muir (2016) によると 'Ideal L2 self' が確立している学生は、“vivid mental image of experience of successfully accomplishing future goal” と説明される 'vision' というより鮮やかな将来の自分のイメージも兼ね備えており、'vision' も第二言語をマスターするための長期的に学習を続ける要因になるとされている。

日本の大学生を対象にした英語学習の動機づけに関する研究では、Yashima (2000) が、総合情報学部在籍する約300人の大学生を対象に、日本における外国語学習の理由・目的に注目した研究を行った。因子分析の結果9つの因子が検出され、中でも異文化への興味を表す「異文化友好オリエンテーション」と職業や資格試験を目的とする「道具的オリエンテーション」の相関が高く、この「異文化友好オリエンテーション」と「道具的オリエンテーション」2つを合わせもっている傾向が明らかになった。

次に鈴木 et al. (2011) の教育大学の1年生と2年生約600人を対象にした英語学習に対する動機づけに関する研究では、1年生と2年生の英語学習動機を比較すると、1年生のほうが2年生よりも高い結果となった。学年が進むと、「高い英語能力を有する人物になりたい」という 'Ideal L2 self' のイメージが持ちにくくなっていることが理由の一つとして挙げられている。

さらに、Takahashi (2013) の “Ideal L2 self and university English learners” という研究では、質問紙を用いた前述の2つの研究とは違い、2年生から4年生の英語専攻ではない大学生6人に対し、'Ideal L2 self' に関するインタビューが個別に行われた。その結果、Takahashi は「インタビュー対象者の 'Ideal L2 self' について、その内容や具体性において幅があること、またアンケート調査に含まれていない 'Ideal L2 self' もあることが明らかになった。」と述べている。例えば、「英語で歌がうまく歌えるようになりたい」や「オンラインゲームの対戦相手と英語でコミュニケーションしたい」などという、教員が思いつかないよう

な英語学習に直結しない ‘Ideal L2 self’ が存在することがわかった。

Yashima (2000)、鈴木 et al. (2011)、Takahashi (2013) の研究は、大学生を対象にしたものであるが、どの研究も英米語専攻の学生を対象にしたものではない。本研究では105名の英米語専攻の1年生の「英語を使用する理想自己（‘Ideal L2 self’）」を質問紙と記述回答から明らかにする。

4. 研究の方法

4.1 調査対象者

調査対象者は、短大英米語学科1年4クラス（中位クラス2、下位クラス1、教職課程1）、および外国語学部英米学科1年1クラス（上位クラス）の計105名である。調査対象学生の入学時の TOEFL ITP スコア平均は400点である。対象学生の海外経験は105名のうち6割の学生が海外へ行ったことがあるが、1名の学生を除き、1週間以内の旅行あるいは、3週間以内のホームステイ等の短期間の海外経験である。

4.2 質問紙調査

学生の ‘Ideal L2 self’ の実態を把握するデータを得るために、英語学習や留学、将来の仕事に対する態度や期待値に関する意識を問う12項目の質問と自由記述3項目を含む計15項目からなる質問紙調査を作成し、6月下旬に授業中に実施した。質問項目のカテゴリーを表1に示す。12項目の質問は、「5そう思う」「4少しそう思う」「3どちらでもない」「2あまりそう思わない」「1そう思わない」の5件法で回答を得た。質問項目は Al-Shehri (2009) の ‘Ideal L2 self’ に関する質問項目 “I like to think of myself as someone who will be able to speak English” “I can imagine a time when I can speak English with native speakers from other countries”などを参考にし、日本語に訳したものを使用した。それ以外は、本学の学生の学習環境に応じた質問項目を作成した。質問項目を資料1に示す。

表1 質問項目のカテゴリー一覧

質問項目のカテゴリー	質問項目数
英語学習関連項目	3
海外・留学関連項目	3
外国人・留学生関連項目	2
理想自己関連項目	4
自由記述	3
計	15

資料1 質問紙

質問項目

- 1 英語を勉強することが楽しい
- 2 ネイティブの先生の授業は楽しい
- 3 英語を使う仕事に就きたい
- 4 外国の人と英語が流暢に話せるようになりたい
- 5 英語で SNS のやりとりができるようになりたい
- 6 授業以外で外国人と話す機会がある
- 7 英語を習得するために外大を選んだ
- 8 学内の留学生と積極的に交流している
- 9 海外で留学してみたい
- 10 留学先で学びたい分野がある
「そう思う」「少しそう思う」の場合は、学びたい分野を具体的に記入してください
- 11 英語を身につけても社会では意味がない
「そう思う」「少しそう思う」の場合は、その理由を具体的に記入してください
- 12 海外へいったことがある
「はい」の場合は、主な渡航先と期間を2つ記入してください
- 13 英語で何をしたいのですか。自由に書いてください

5. 結果と考察

5.1 学習意欲及び動機づけ

Q1「英語を勉強することが楽しい」に対する回答の平均値が4.22、Q2「ネイティブの先生の授業が楽しみ」が4.00と英語の学習意欲は高いことがわかる。さらに、Q4「外国の人と英語が流暢に話せるようになりたい」が4.91と質問項目内で最も高い平均値を示し、Q5「英語で SNS のやり取りができるようになりたい」も4.51と高いことから、英語をツールとして使用する目的意識が強く、目標言語を話す人々に対する統合的態度も高いことがわかる。次に、道具的動機付けに関する質問Q3「英語を使う仕事に就きたい」4.50、Q9「海外で留学したい」も4.51も高いことから、仕事や留学という目標を持ち、英語学習に取り組んでいることがわかる。しかし、学習意欲、統合的態度、道具的動機付け、留学願望が高いにも関わらず、Q8「学内の留学生と積極的に交流している」は1.71、Q6「授業以外で外国人と話す機会がある」2.67と低く、「話したい」という願望を実際に行動に移すまでには、ハードルが高いことがわかる。(表2)

表2 基本統計量

	質問項目	人数	平均	標準偏差
Q 1	英語を勉強することが楽しい	105	4.22	0.80
Q 2	ネイティブの先生の授業は楽しい	105	4.00	1.14
Q 3	英語を使う仕事に就きたい	105	4.50	0.83
Q 4	外国の人と英語が流暢に話せるようになりたい	105	4.91	0.31
Q 5	英語で SNS のやりとりができるようになりたい	105	4.51	0.94
Q 6	授業以外で外国人と話す機会がある	105	2.67	1.34
Q 8	学内の留学生と積極的に交流している	105	1.71	0.92
Q 9	海外で留学をしてみたい	105	4.51	0.92

5.2 下位尺度間の相関

全質問項目間の相関係数を基に以下の4つの下位尺度を算出した。4つの下位尺度と質問項目を下記にそれぞれの合成変数の平均と標準偏差と相関関係を表3に示す。

- ①英語好意性 Q 1 「英語を勉強することが楽しい」、Q 2 「ネイティブの先生の授業は楽しい」
- ②学習目的意識 Q 4 「外国の人と英語が流暢に話せるようになりたい」、Q 5 「英語で SNS のやりとりができるようになりたい」
- ③交流行動力 Q 6 「授業以外で外国人と話す機会がある」、Q 8 「学内の留学生と積極的に交流している」
- ④理想自己 Q 3 「英語を使う仕事に就きたい」、Q 9 「海外で留学をしてみたい」

表3 下位尺度得点間の相関関係

	平均	標準偏差	N	①英語好意性	②学習目的意識	③交流行動力	④理想自己
①英語好意性	4.11	0.83	105	—	0.102	0.109	0.468**
②学習目的意識	4.71	0.52	105		—	0.073	0.223*
③交流行動力	2.19	0.94	105			—	0.001
④理想自己	4.51	0.75	105				—

**：p < .001 *：p < .005

各下位尺度項目群の平均値の相関関係を検証すると、①英語好意性と④理想自己は、 $r=0.468^{**}$ と中程度の相関があった。授業や英語学習を楽しんでいる学生は「留学をしたい」、「英語を使う仕事に就きたい」という明白な目標をもっていることがわかる。次に、②学習目的意識と④理想自己は $r=0.223^{*}$ と弱い相関があることがわかった。「話せるようになりたい」「SNSでやりとりをしたい」という目の前の具体的な目的が将来的な目標に繋がる可能性があるといえる。④理想自己つまり‘Ideal L2 self’が、英語好意性や学習目的と深く関係しているという点で、先行研究と一致している。

5.3 記述回答の結果

5.3.1 「英語だけを身につけても社会では意味がない」に対する記述回答

Q11「英語だけを身につけても社会では意味がない」に「そう思う」「少しそう思う」と回答した理由を具体的に記入してください。という問いに対する回答では68の回答(65%)が得られた。記述回答をKJ法により切片化した語とその頻度を表4に、カテゴリー化を行い図式化した結果を図1に示す。65%の学生が、英語ができるのは当たり前になりつつあり、英語だけでは社会では通用しないと考えている。その理由として、社会や職場では、「一般常識」、「コミュニケーション能力」、「専門的な知識」などのプラスアルファのスキルが不可欠であると感じている。「一般常識」については「礼儀正しさやマナーが重要。」などの記述例が、「コミュニケーション能力」に関しては「英語ができる人は多くいるし、社会ではコミュニケーション能力が必要。」などの記述例が、「専門的な知識」に関しては「専門的知識が身につけていないと、英語で伝えたいことも伝えられない。」などの記述例があった。

このように専門知識の必要性を感じながらも、Q10「留学先で学びたい分野がある」という問いには、「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」と61%の学生が回答しており、1年生の段階では、留学したいという希望があるが、どのような専門分野を学びたいかというビジョンを持っている学生が少ないことがわかる。「学びたい分野を具体的に記入してください」という記述からも38人が学びたい分野があると答えたが、「文化や言語」を学びたいと漠然とした回答が15人と最も多く、具体的に「経営」、「ホスピタリティ」が学びたいと回答した者がそれぞれ4人だけであった。この結果から、留学の目的として「文化や言語」だけではなく、具体的に学びたい内容を学生に意識させることが教員に求められている。短大1年生ではCBI(Content-based Instruction)で英語必修授業が行われているが、languageよりもcontentsをより強調させた教授内容にする必要がある。さらにCLIL(Content and Language Integrated Learning)の教授法を多く英語必修授業で取り入れることにより、内容と目標言語を同時に学ぶことができる。これらの教授法は次期学習指導要領の内容とも合致している。Allen-Tamai, M. (2015)は、「CBI/CLILが目指す外国語目標の目的は、新しい学習指導要領で示された「育成すべき資質・能力」の3本の柱に呼応するものである(中略)」と述べている。

表4 「英語だけを身につけても社会では意味がない」に対する理由への記述回答の切片と頻度

切片化された語	頻度
常識が必要	15
英語は当たり前	11
英語だけでは意味がない	8
(専門) 知識が必要	5
コミュニケーション能力が必要	5

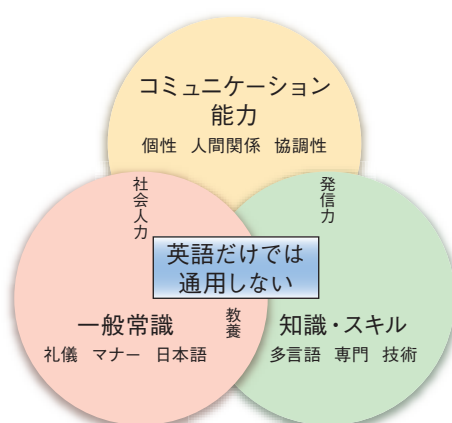


図1 「英語だけを身につけても社会では意味がない」に対する理由

5.3.2 「英語で何をしたいのですか？自由に書いて下さい」に対する記述回答

Q13「英語で何をしたいのですか？自由に書いて下さい」に対する質問には105の回答が得られた。KJ法により切片化した語とその頻度を表5に、カテゴリ化を行い図式化した結果を図2に示す。記述回答を切片化すると最頻単語は「英語」で、次に多かったのは「外国人(外人、ネイティブなどを含む)」だった。「英語」と最も共起している語は「話す」であった。記述回答を「話したい」「文化知りたい」「助けたい」という3つの大きなカテゴリーに分類し、これらを「外国人とのコミュニケーション」に集約した。「話したい」については「外国人が話していることをすぐに理解してコミュニケーションをとりたい。」などの記述例が、「文化を知りたい」に関しては「留学や海外旅行を通して多様な文化にふれあい、異なる価値観や適応能力を身につけたい。」などの記述例が、「助けたい」に関しては「外国人観光客が困っているときに助けてあげたい。」などの記述例があった。

Yashima (2000) の研究では、英語学習の目的として9つの因子が検出されており、その中の「異文化友好オリエンテーション」という因子は、今回の結果の「話したい」と、Yashima

(2000) の「英米文化への興味」という因子は今回の結果の「文化を知りたい」というカテゴリーと一致すると考えられる。しかし「(外国人を) 助けたい」というカテゴリーは Yashima (2000) の研究と一致するものが無く、Takahashi (2013) が行った 'Ideal L2 self' に関するインタビューでも出現していなかった。本研究では、英語が話せたら「外国人に道案内をしたい」。「バイト先に (外国人が) 来たときに接客をしたい。」「日本の観光地を紹介したい。」などの記述が多く見られたことはとても興味深い。英語を話すことにより人間関係を構築しようとする態度が窺える。本学の学生は、英語をツールとした目標行動（「(外国人を) 助けたい」）と自己効力感を結びつける傾向があると言える。このような英語学習の目的は、本学の学生特有のものであるのか、日本に外国人の観光客が増加した今のような時代では、日本の大学生が一般的に持つ英語学習の目的であるのか、今後検証すべき課題である。

表5 「英語で何がしたいですか」に対する記述回答の切片と頻度

切片化された語	頻度
英語を話す	53
外国人と話す／話したい	33
外国人と会話	23
外国人とコミュニケーション	10
外国人を案内	9
字幕なし映画	9
友達になる／なりたい	7
文化話したい	5
外国人に接客	4
文化に触れたい	3
バイト先で接客	3
旅行者を案内	2

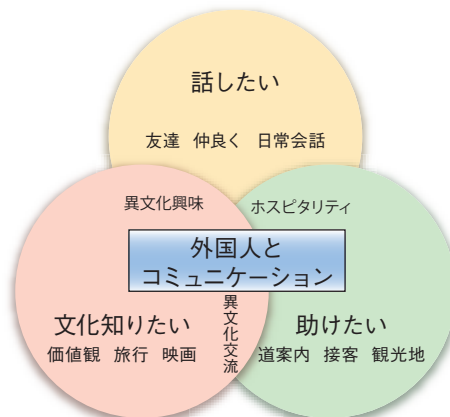


図2 「英語で何がしたいですか」に対する回答

6. 提言

6.1 留学生との交流

今回の調査で1年生は「外国人とコミュニケーション」を希望しているにもかかわらず、留学生との交流が少ないという結果であった。本学は留学生を年間約700人受け入れており、留学生との交流プログラムは多く存在するが、ホームビジットやエクスペリエンスジャパンなどはイベント性が強く、継続的な交流に結びつかない可能性があるプログラムもある。スピーキング・パートナーはどの学生でも応募できるが、希望する学生が多く、応募してもパートナーに出会えずがっかりする学生が多い。ルームメイトプログラムやレジデントアシスタンスプログラムは、絶対数が少なく、英語力があり面接に合格した学生だけができるため、狭き門である。留学生と同じ授業を履修するにはTOEFLの点数ハードルが高く、留学準備をするために選ばれた学生のみが履修している。そのため、日常的に留学生と交流するかどうかは学生個人の英語力や行動力のみにかかっている。八島(2004)は「英語で異文化の相手とコミュニケーションを図り、それが肯定的な経験であると、さらに国際的志向性や学習動機に結びついたり不安を緩和するものだと思う」と述べている。同じキャンパスで学ぶという環境は整っているため、学生が留学生と肯定的な経験をすることができるように、大学のシステムの改善が求められる。例えば、留学生と学生の交流プログラムの増加や再考、同じ建物で留学生と一般学生が学べるような教室配置、留学生と一般学生と一緒に履修できる授業を増やすことなどである。次に教員が行うことができる授業内外での方策について述べる。

6.2 授業内外のタスク

Takahashi (2013) の研究によると、学生が 'Ideal L2 self' を持つために教員が行うべき役割が2つ挙げられている。1つは、日本人の教員であるため、英語が通じないという不安なしに英語でのコミュニケーションを行う練習の相手になれるという役割である。教員だけでなくクラスメートとの練習も、間違っても理解できるという安心感があるため、実践的な場面を想定したコミュニケーション活動を授業内で多く行うことで、授業外のタスクへの scaffolding になると考えられる。定型会話の練習や準備したものを話す prepared speech のみを行うのではなく、教室内で negotiation of meaning が生じるようなリアルな状況で会話を行うことで、即興性に対応できるコミュニケーションスキルを培うことができる。

しかし学生の「外国人とコミュニケーションをしたい」という目標に答えるためには、授業内の活動だけでは、学生の 'Ideal L2 self' を育成するには不十分である。筆者は英語必修授業内で、授業で扱ったテーマについて留学生にインタビューをし、その結果を授業で発表するというタスクを行っている。このような授業内と連動させた留学との活動を増やすことが、

‘Ideal L2 self’ をより意識させることができる方策である。学生は留学生へのインタビューを通し、想像した答えと全く異なった返答が留学生から返ってきたり、他のグループがインタビューした内容に驚いたり、他のグループの発表にも興味を持ち聞いている様子が窺える。留学生との交流により、授業内だけでは得ることのできない達成感を感じていることがわかる。さらに、本学の学生は、目標言語を話す人と関わりたいという高い動機づけがあるため、学内の留学生だけではなく、授業外活動として、道案内や京都の観光案内の要素を含んだプロジェクト型タスクを与えることで、学生は成功体験を重ねることができる。

もう一つの教員の役割として挙げられているものは、日本人の教員が英語学習をする過程での苦労や留学の経験の話をする事によって、学生のロールモデルになることである。学生から「先生は何か国行ったことがあるのですか」、「いつから英語を話せるようになったのですか」と聞かれることがよくある。しかし、このような質問をしてくる学生は、授業内ではなく、授業外で研究室に質問に来た際にされることが多い。これからは、授業内でも教員自身の学習経験や英語学習の方法、留学経験を話すことが大切である。教員だけでなく、留学から帰国したばかりの先輩から話を聞くことも有益である。留学を終了した2年生の学生から1年生に体験談を授業中にしてもらったことがあるが、1年生からは多くの質問があり、身近に留学を経験した人の話を聞くことは、学習の動機づけになると考えられる。

7. 今後の課題

本学の学生は2年生で長期留学の選考が始まり、短大生は2年生で編入や就職が目の前にせまってくる。3年生になるとインターンシップや業界説明会などに参加し、就職のことについて考え、より鮮明な‘Ideal L2 self’ が芽生えてくることが予想される。しかし、鈴木 et al. (2001) の研究では学年が進むと「理想自己のイメージが持ちにくくなっている」という結果がでている。本研究は1年生のみを調査対象にしており、2年生、3年生での変化が把握できないため、本研究の追跡調査として学年が進むことによる‘Ideal L2 self’ の変化を調査する必要がある。

8. おわりに

本研究により、1年次の学生が持つ‘Ideal L2 self’ は曖昧なものであり、目標言語を話す人と交流したいという動機づけが高いが、留学した際に何を学びたいかなどといった具体的な目標を持っている学生が少ないことが判明した。また、先行研究では存在しなかった「(英語が話せるようになったら) 外国人を道案内などで助けたい」というカテゴリーが出現したこと

が興味深い。今後は、学生が留学した際に何を学びたいかを意識できるように、内容と目標言語を同時に学ぶことができる CLIL 型の教授法を授業内で行い、授業外でプロジェクト型タスクを課しながら、留学生と交流できる機会を増やすアシストを教員が行っていく必要がある。これらの方策により、学生の 'Ideal L2 self' が鮮明になり、英語学習の長期的動機づけが高まる。本学は英語力とプラスアルファのスキルを身につけた多くの学生の自己実現が可能になる学びの場にならなければいけない。

参考文献

- Allen-Tamai, M. (2015). 「内容を重視した外国語教授法」『ARCLE REVIEW』10. ベネッセ教育総合研究所. 53-63.
- Al-Shehri, A. S.(2009). Motivation and vision: The relation between the 'Ideal L2 self', imagination and visual style. *Motivation, Language Identity and the L2 Self*, 164-171.
- Dörnyei, Z. & Ushioda, E.(2009). *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z., Henry, A., & Muir, C.(2015). *Motivational Currents in Language Learning: Frameworks for Focused Interventions*. Routledge.
- 入江恵 (2008). 「英語学習動機づけ研究 — L2 セルフシステム理論とその応用」『紀要. 桜美林英語英米文学研究』48. 桜美林大学. 33-48.
- 川喜田二郎 (1967). 『発想法』中公新書.
- 文部科学省 (2015). 「教育課程企画特別部会 論点整理」.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf
より採取 (2016年10月20日)
- 中田賀之 (2016). 「『外国語学習動機づけ研究』再考 — 価値付けの概念」『JACET Kansai Journal』. No.18. Kansai Chapter The Japan Association of College English Teachers. 1-20.
- Suzuki, M. (2011). Ideal L2 Selves of Japanese English Learners at Different Motivational Level. 『創価大学大学院紀要』33. 創価大学大学院. 329-351.
- 鈴木渉・Adrian Leis・安藤明伸・板垣信哉 (2011). 「大学生の英語学習に対する動機づけ調査 — Dörnyei の L2 motivational self system に基づいて」『宮城教育大学国際理解教育研究センター年報』第6号. 宮城教育大学. 34-43.
- Takahashi, C. K.(2013). Ideal L2 self and university English learners: An interview study. *The Language Teacher*, 37(6), 3-8.
- 八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機 — 研究と教育の視点』関西大学出版部.
- Yashima, T., & 八島智子 (2000). Orientations and motivation in foreign language learning: A study of Japanese college students. *The JACET Bulletin*, 31, 121-133.

(はら・めぐみ 短期大学部講師)